

# 衛生のアミューズメントパーク

—— ドレスデン国際衛生博覧会(1911年)の啓蒙戦略 ——

村 上 宏 昭

# 衛生のアミューズメントパーク —— ドレスデン国際衛生博覧会(1911年)の啓蒙戦略 ——

村上 宏 昭

はじめに

近代は「視覚の時代」と言われる。その意味は、近代の心性において「リアルなもの」とされるのは唯一「目に見えるもの」だけという、いわば可視性の信仰に囚われた時代だということである。この信仰のために、私たち近代人は常に身体内部の臓器やミクロの世界の微生物、さらには人口という、物理的な基盤を欠いた純理論的構成物すら直に目視しようとする衝動に駆られる。それも、できるだけ正確かつ具体的に、である。たとえ宗教ないし民間信仰から生まれた理想郷や幽鬼であろうと、「現在あるい是何年前と定まった時点の、どこか具体的な場所に、目に見えるかたちで存在しなければ、“まことの現実”とは考えられなくなってしまう」のであり、それゆえ「エデンの園のような理想郷は、『極東』の農村に“発見”されることで大いに喜ばれ、悪霊は顕微鏡によって細菌としての姿を“見出”されることではなはだしく忌避される」ようになるのである<sup>1</sup>。

19世紀のヨーロッパは、こうした可視性の信仰をそのまま体現するようなイベントを編み出した。博覧会というイベントである。1798年にパリで最初の産業博覧会が開催されて以降、このイベントは徐々に周辺諸国にも伝播していくが、1851年にロンドンで開かれた世界初の万国博覧会を機に、ヨーロッパは本格的に博覧会の時代を迎えることになる<sup>2</sup>。これらの万博で展示された数々のオブジェの細部にわたる正確さ、たとえば植民地都市の無秩序な街並み、あるいは日本家屋の佇まいのように、エキゾチックな都市景観や、等身大の人形（ないし本物の現地人）を用いた風俗の再現などはすべて、完璧な模造品を眺めることで世界を「リアル」に体感したいという、近代ヨーロッパ人の視線の欲望を客体化したものにほかならない。

ただ当時の欧米ではこうした壮大で絢爛豪華な万博のほかにも、商工博覧会や建築博覧会、美術博覧会、さらには住宅事情・給排水設備・文化事業などを紹介する都市博覧会等々、特定の主題に特化した、もっと小規模で目立たない特別博覧会が各地で無数に開催されていた<sup>3</sup>。ヨーロッパ近代を博覧会の時代と呼べるとすれば、それはこれら無数の小博覧会群が、燦然と輝く壮麗な万博（その巨大さゆえに西洋全体でも数年おきにしか開催されなかった）の空隙を埋める形で、

日常的にヨーロッパ人の視覚的欲求を充足させていたからである。それだけに、博覧会の時代として当時のヨーロッパを捉えようとするならば、これまでの博覧会研究でしばしば見られた万博偏重主義的な傾向は、いたずらに視野を狭めるものになりかねないだろう<sup>4</sup>。

とはいえもちろんこうした無数の小博覧会群をここで逐一列挙するわけにもいかず、この点は今後の個別研究の蓄積を待つほかはない<sup>5</sup>。代わりにここでは、これら小博覧会群のなかでもその規模とユニークさの点でひととき異彩を放つ、1911年のドレスデン国際衛生博覧会なるイベントを取り上げてみたい<sup>6</sup>。その名のとおり「衛生」をテーマにしたこの一見奇妙な博覧会は、ヨーロッパだけでなくアジア地域を含む総計12カ国が出展し、また5月6日から10月31日までの開催期間で来場者数が累計550万人にも達したように（1905 - 1913年に開かれた万博の平均来場者数は約900万人）、当時の特別博覧会としては未曾有の成功を収めたものである<sup>7</sup>。

後述するように、この20世紀初頭のヨーロッパ社会にあっては都市の衛生環境の改善が喫緊の課題として浮上し、その改善を推し進めるための前提として、行政の公衆衛生事業に対する都市住民の理解と協力が不可欠だと認識されるようになっていた。そうした問題意識に拠りながら、都市住民への啓蒙活動の一環としてこの種の衛生博覧会が広く試みられていくことになるが、注目すべきはその際に、万博を特徴づけていたのとまったく同じ戦略がここでもそのまま踏襲されていたことである。つまり、視線の欲望を刺激するスペクタクルに満ちた空間が、啓蒙・教育を主眼とする衛生博覧会という場においても現出することになったのである。

ベンヤミンがいうように、万博のスペクタクル装置が純然たる道具（使用価値）としての商品の販促だけでなく、商品そのもの（交換価値）の物神崇拜——と、それを娯楽として享受する「気晴らし」——をもたらすものであるならば<sup>8</sup>、同じことが多かれ少なかれこの衛生博覧会にも妥当するはずであろう。いいかえれば、単なる啓蒙・教育を越えた「視覚的享樂」への嗜好もまた、このイベントの成功をもたらす一つの大きな要因として作用していたと思われる。そのため本稿では、もっぱら衛生博覧会に見られるこうした「視線」へのアピール戦略に焦点を当てることで、視覚の時代に特徴的な衛生啓蒙運動の一面を浮き彫りにしていきたい。

## 1. 衛生博覧会の時代

### 都市の衛生問題

だがその前にまず、ほかならぬこの20世紀初頭という時代に衛生博覧会なるイベントがこれほど大きな人気を博した歴史的理由を整理しておこう。いうまでもなくこの人気はひとえに、都市生活における衛生と健康の問題が広範に人びとの心を捉えたことに帰せられるが、そもそもヨーロッパ社会でこうした問題が公衆の関心を集めるようになった背景には、当然ながらそれなりの歴史的文脈があった。ここでは三つほど挙げておく。

①まず、それまで王権の関心から完全に外されていた人民の健康・病気の問題が、18世紀に「脱私化」(Entprivatisierung)・「社会化」(Vergesellschaftung)され始めたことが挙げられる。すなわち、この18世紀を境に健康と病気は個人の問題ではなくなり、公権力の介入目標として「私的領域から政治解釈の対象へと押し上げられる」ことになった<sup>9</sup>。なおフーコーに言わせれば、その裏にはちょうどこの時代に「人口」という、固有の変化や移動の法則を持つ「まったく新しい政治的人物」が登場してきたという事情がある。これによって個人の疾患は、人口状態の正常化を目指す近代の統治権力にとって、人口全体の罹患率・死亡率を炙り出すための不可避の回路になったのであり、まさしくそれゆえに健康と病気の問題が個人の次元を越えて集団化・公共化されるにいたったのである<sup>10</sup>。

②こうした事情を反映してか、すでに18世紀末の時点で無数の「健康雑誌」のたぐいが発行され、市民層の間で「社会的義務」としての健康を喧伝するプロパガンダが巻き起こっていたが<sup>11</sup>、それとは別に19世紀の一世紀間を通じてヨーロッパが繰り返し「青い恐怖」コレラに襲われたという歴史的状況も、健康問題の公共化という上記の傾向に拍車をかけたといえる。元来インド・ベンガル地方の風土病として存在していたコレラは、1817年に突如パンデミック化し、1829年にロシアに上陸したあと、早くも1830年代初頭には——東はポーランドから西はイギリスにいたるまで——ヨーロッパ全土を覆い尽くしていった。これによってヨーロッパ世界は、ペストの終息(17世紀中葉)以来じつに一世紀半ぶりの巨大な疫病を経験することになるが、いずれにせよこれ以降1896年まで(数年間のインターバルを何度か挟みつつも)コレラの猛威が吹き荒れ続けたことで、ヨーロッパに深いトラウマを残すことになったのである<sup>12</sup>。

③このようにコレラがヨーロッパ中で猛威を振るうなか、都市の衛生環境を改善しようとする動きが、まずは行政当局から活発化してくることになる。なかでもオスマンのパリ改造は有名だが、それ以前からパリの不衛生住宅は(1832年のコレラ流行を機に)疫病と不道德の温床として警察の監視対象となっていた<sup>13</sup>。こうした都市の住環境問題の背景には、産業化に伴い市域外から大量の労働人口が流入したことで、都市のキャパシティが限界に達していたという事情がある。それゆえこの都市衛生問題は、資本主義の成熟期を迎えたヨーロッパ諸国では共通して見られた現象であり、ベルリンでも19世紀後半には同じように急速な人口増加によって衛生環境が劣悪化し、特に労働者街区はその過密な雑居状態からチフスや結核、コレラなどの疫病をもたらす脅威として認識されるようになる<sup>14</sup>。

実際、以上三つの歴史的文脈が相互に連動し始めたこの19世紀後半ごろから、衛生博覧会というイベントが徐々に国際的な脚光を浴びるようになっていく<sup>15</sup>。特にドイツは、1883年にベルリンで「全ドイツ衛生・救命博覧会」(Allgemeine Deutsche Ausstellung auf dem Gebiete der Hygiene und des Rettungswesens)が、また1903年にはドレスデン都市博覧会の特別展として「国民病とその克服」(Volkskrankheiten und ihre Bekämpfung)なる展覧会が開催されたこともあって<sup>16</sup>、

ヨーロッパのなかでも衛生と健康の問題に特化した博覧会の中心地となり、それ以降20世紀半ばにいたるまで——つまりは博覧会の時代が終焉するまで——その地位を他国に明け渡すことはなかった。1911年に行われたドレスデン国際衛生博覧会が異例の成功を収めることができたのは、それが一世紀以上にわたって展開してきたこれら複数の文脈の同時存在、あるいはそれらの文脈が互いに収斂していくなかで形づくられた当時の歴史的心性と、深く共振し合っていたからであった。

## 大衆志向

とはいえ当然ながら、こうした衛生博覧会なる試みが繰り返されること自体、当時の公衆の間で相応の衛生観念がなお根づいていなかったことを物語っている。あるいは少なくとも博覧会の主催者の目には、公衆には相変わらず衛生に関する正しい知識が欠落していると映っていたようだ。たとえばこの国際衛生博覧会の最大のスポンサーであり、8年前の「国民病とその克服」展の企画者でもあった企業家カール・アウグスト・リングナー（今でもドイツでポピュラーなマウスウォッシュ「オドール」(Odol)の開発者でもある<sup>17)</sup>は、次のように博覧会の準備段階で衛生や健康に関する大衆の「混乱した」観念を垣間見て、心底愕然としたと告白している。

「専門の衛生学者にはほとんど信じがたいことだが、衛生に関しては住民の大多数がまるで無知なのである。圧倒的多数の人間が、それも奇妙なことに教養ある人でさえ、ほとんどが衛生についてまったく混乱した考えを持っている。衛生のことを単なる看病とイメージしている者もいれば、科学の道具や薬剤を使うボランティアか仕事だと考える者もいる。こうした無知がどれほど大きいかは、私たちが博覧会のポスターの懸賞公募をした際に経験している。それには驚愕した、いやゾッとしたと言った方がいい。応募してきた530点のポスターのうち、800匹を下らない数の蛇が描かれていたのだ。それらの蛇は何かで突き刺されたり、絞め殺されたり、踏みつけられたり、あるいはまったくありえない道具で打ち倒されたり殺されたりしていた。それだけではない。ボランティアや看病などを題材にしたポスターもいくつもあった。要は誰も衛生なる概念を正確に分かってなどいないのだ。しかも、これらのポスターの作者はまがりなりにも教養人の階層にある人たちなのだから、無教養の人間は推して知るべしだろう！<sup>18)</sup>」

つまり、公衆は衛生なるものを——各人がおのれの意志で生活態度を律する必要がある——「予防」ではなく、もっぱら専門家やボランティアの手にゆだねるべき「治療」（蛇の退治・病人の看護）の一種としか考えていないというわけだ。これはいいかえれば、衛生の問題は素人たる自分たちには何の責任も関係もないという考えである。しかもこうした公衆に対する印象はまた、

行政当局による衛生対策がこれまでたびたび「無知」な住民の抵抗に遭ってきたという経験に裏づけられたものでもあった<sup>19</sup>。それゆえ主催者側としては、この衛生博覧会が成功するか否かについては、直前まで疑心暗鬼にならざるをえなかった。「実際、多くの人びとの間で、この博覧会は自分たちには面白味のないもの、専門家の博覧会だという噂が飛び交っていたことは、私たちの耳にも届いていた<sup>20</sup>」からである。

それだけに、この衛生博覧会では何よりもまず「いかにして公衆の関心を引くか」ということが最重要課題となった。それはたとえば、博覧会の開催に向けた折衝の一環としてリングナーがドレスデン市長に宛てて書いた手紙（1906年8月1日付）でも明言されている。そのなかで彼は、過去に行われた博覧会が展示品を単純に並べ置くだけで、来場者に対し健康の大切さを効果的に伝えるノウハウを欠いていたことを批判しながら、次のようにしたためている。

「この10年近く、私は衛生に関する知識を迫力のあるやり方で大衆に伝えるという問題に取り組んできました。多くの場合下層の民衆に向けたものでしたが、ずいぶん手の込んだ試行錯誤を無数に繰り返したあとで、私は次のような揺るぎない確信を得ました。すなわち、こうした衛生観念の育成はただ単純明快に組み立てられた視覚教育によってのみ可能であること、そして若者層を対象とする場合、この単純明快な視覚教育は以下のやり方で成し遂げられるということです。つまり、立体のオブジェを展示すること、健康な臓器と罹患した臓器をそれぞれ目に見える形で披露し、それらの機能をふさわしい仕方で解説すること、また病原体とその感染のしやすさ、ならびに感染後の症状やそれに対してなされる措置、そしてこれまでなされてきた予防措置の効果等々を視覚的に提示することです<sup>21</sup>」。

要するに、衛生の知識をまるで持ち合わせない無知な人間を博覧会に取り込むには、視覚に訴えかける工夫こそ最も効果的だという姿勢である。こうしたリングナーの方針を受けて、国際衛生博覧会の準備委員会でも「二つの主要課題」なるものが設定され、専門家向けと大衆向けという二重の戦略が採られることになる。つまり、従来この種の特別博覧会で主要なターゲットになってきた学者・医師・官僚・教員・技術者等々、専門家たちのための展示に加えて、新たに衛生・健康の専門職とはまったく無縁な一般市民を対象としたパビリオンも大々的に設置し、その内部に上記の方針に沿ったスペクタクル装置を配置するという方式である<sup>22</sup>。これまでその筋の専門家や好事家など、限られた層にのみ親しまれてきた特別博覧会が、ここにおいてありとあらゆる嗜好や階層の人びとにも開かれた、国民的なイベントへと生まれ変わろうとしていた。

## 2. 国際衛生博覧会探訪

### アトラクションの空間

それでは、以上のような主催者たちの方針・戦略は、実際の博覧会の現場においてはどのような形で具体化されることになったのか。ここではもっぱら来場客向けに作成された公式カタログとガイドブックを参照しながら、この博覧会の内部の様子を窺ってみることにしよう。

ガイドブックを開いてみてまず目に飛び込んでくるのは、入場料金の一覧である。博覧会場への入場料金は基本的に大人ひとり当たり1マルクで、学校の社会見学やその他の団体客のための各種割引券もある(30-70ペニヒ)。なお混雑を避けるためか、時間帯によっても料金はかなり異なっていたようで、9-10時の入場は2マルクと通常の二倍、逆に19時以降は50ペニヒと半額になっている<sup>23</sup>。

しかしそれよりも目を引くのは、そのあとに続く数々の娯楽イベントの紹介である。この博覧会を訪れた者は、ただ単に会場内に展示されてあるオブジェを観賞しただけではない。その開催期間を通じて、休憩や気晴らしのために、会場の敷地内(広さは320000㎡で、東京ドーム約7個分に相当する)に設けられた高級レストランや老舗喫茶店、バー、ボデガ、アラビアン・カフェ等々でくつろげたほか、ボーリングやリュージュ、ダンスに興じたり、劇団の寄席や人形劇、プロムナードコンサートやレストランコンサートなどの演奏会、はたまた各種スポーツの対抗試合など、諸々の催し物にも足を運ぶことができたのである<sup>24</sup>。たとえばスポーツ行事をいくつか取り上げてみると、もっぱら週末に集中して次のようなものが行われていたらしい。

- |           |          |                       |
|-----------|----------|-----------------------|
| 5月7日(日)   | ホッケー     | ドイツ大学別選手権大会(決勝戦)      |
| 5月7日(日)   | サッカー     | 都市対抗試合 ベルリン対ドレスデン     |
| 5月13日(土)  | サッカー     | グラスゴー・セルチック対ドレスデン     |
| 5月21日(日)  | モータースポーツ | モーターボート航行 ピルナードレスデン間  |
| 5月末       | 飛行スポーツ   | ザクセン王国飛行船協会主催ザクセン一周飛行 |
| 6月4日(日)   | サッカー     | ドイツ選手権大会 決勝           |
| 6月18日(日)  | 体操       | 体操大祭典                 |
| 7月16日(日)  | アスレチック   | 国際試合                  |
| 8月20日(日)  | スポーツ祭典   | ドイツ・オリンピック大会帝国委員会主催   |
| 10月15日(日) | サッカー     | 国際試合 ドイツ対フランス         |

しかもこれらのスポーツ行事は博覧会の来場客の間で大変な好評を博したようで、後年リングナー自身この試みを振り返って、「国際衛生博覧会のスポーツ行事によって、ドレスデンは第一

級の競技場になった」と自負している。ただしこうしたスポーツ・イベントは、衛生博覧会の理念とまったく無関係な単なる娯楽として用意されたわけではない。それはあくまで、「スポーツと身体管理は直接つながっている」という考えにもとづいた催し物であり、だからこそリングナーはのちに国立衛生博物館の設立を提言した際にも、「衛生博物館と合わせて、毎年同じような〔スポーツ〕祭典を執り行うこともできるかもしれない。そうすればすぐに何千もの人びとがドレスデンに殺到するようになるだろう」との構想も披瀝していたのである<sup>25</sup>。

しかしその一方で、これらの娯楽イベントがこうした建前上の理念で汲み尽されるわけでもない。むしろこの種のスポーツや演奏会などの催し物は、万博を含む博覧会一般の見世物興行としての性格を引き継いだものと見てよいだろう。現に、たとえば1896年のアテネに始まるオリンピック大会ですら、当初はあくまで万博の「余興」として開かれていたように、スポーツ・イベントはすでに国際衛生博覧会以前から、集客のためのアトラクションとして知られていたものであった<sup>26</sup>。

またこのスポーツ祭典と同じく、大衆の魅了を目的としたスペクタクル装置も、パピリオンの屋内外を問わず博覧会場のあらゆる空間に張り巡らされていた。たとえばザクセン王フリードリヒ・アウグストが衛生博覧会のために開放した王立の庭園、なかでも「ヘラクレス通り」(Herkules-Allee)と呼ばれた並木道は、電飾や噴水など視覚に訴えるさまざまな仕掛けがふんだんに施され、来場客の間でも話題となった場所である(図1)。むろん博覧会のガイドブックにも、このヘラクレス通りのことが誇らしげに紹介されている。「私たちが逍遥しているこの王立の大庭園をひとときわ素晴らしいものにしてているのは、霊妙な木立や小道、芝生や噴水、池や彫像だけではありません。……夏の夜には、この『諸国民通り』(rue des nations)は何千もの小電球によっておとぎ話の世界のようにライトアップされ、上品なカフェやレストランとともに国際色豊かな第一級の散歩道に変わるのです<sup>27</sup>」。

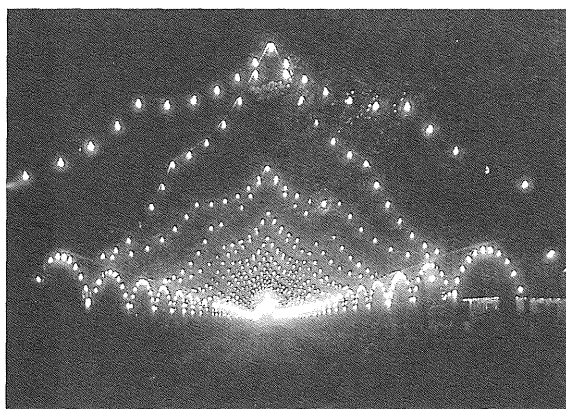


図1 ヘラクレス通り (Georg Seiring (Hg.), *10 Jahre Dresdner Ausstellungsarbeit. Jahresschauen deutscher Arbeit 1922-1929 und Internationale Hygiene-Ausstellung 1930/31*, Dresden, 1931, S. 204)

ちなみにこうした光の洪水による幻想的なスペクタクル空間の創出という手法も、19世紀の万国博覧会——と、そのノウハウを受け継いだ「消費の殿堂」百貨店——のアトラクション戦略をそのまま踏襲したものにほかならない<sup>28</sup>。いずれにせよ、このようにドレスデン国際衛生博覧会では、展示とは直接関わりのない屋外の空間すら、さまざまな娯楽イベントとファンタジックな装飾に満たされたアミューズメントパークに仕立て上げられていた。この博覧会の主催者たち



は、まずはこうした仕掛けを屋外のありとあらゆる場所に限なく設置することで、衛生の素人たる大衆をいわばパビリオンの内部へと誘導しようと企図していたのである。だがもちろん、肝心のパビリオンのなかでは、こうした形で大衆を熱狂させるような祝祭的アトラクションはふさわしいものではない。屋内にあっても来場者の関心をつなぎ止めるには、喧しいお祭り騒ぎとは別の仕掛けが求められるのである。

### 「人間」展示館

ところで先にも触れたように、先行する特別博覧会に比べてこの国際衛生博覧会の最大の特徴となっていたのは、何といても専門家向けの展示と非専門家向けの展示とを、はっきりと区別しつつ同時に提供した点である。もう少し具体的にいえば、この博覧会は大きく分けて大衆部門・科学部門・歴史部門（この下に民族学部門も置かれた）・産業部門の四部構成になっており、それぞれの部門に住居・飲料水・食糧・感染症などのテーマを扱うブースや個室が置かれていた<sup>29</sup>。こうした編成はいうまでもなく、たとえば行政官僚など専門性の高い職業人は科学部門に、また展示された商品の生産・販売にたずさわる工場主や小売業の人は産業部門、そして一サラリーマン・都市労働者・農民から有閑マダムにいたるまで——数の上では最大の非専門家層は大衆部門にと、あらゆる職業・年齢・性別の人間をターゲットにすべく考案されたものであった<sup>30</sup>。

それゆえ上のような数々のアトラクションで誘い込まれた来場客は、その大半がまずは大衆部門に向かうことが想定されていた<sup>31</sup>。実際、これが功を奏したのか、この大衆部門の代名詞となった「人間」展示館は、のちの衛生啓蒙運動でも語り草になるほど高い人気を誇ることになった。博覧会終了後、リングナーも満悦しながらこう回顧す



図2 「人間」展示館(上)とその前に並ぶ長蛇の列(下)  
(Seiring (Hg.), 1931, S. 175; Justus Ferdinand Wolff, *Lingner und sein Vermächtnis*, Hellaerau, 1930, S. 25)

るほどに。「炎天下に何千もの人びとが、『人間』展示館の前の砂場で自分の順番が回ってくるのを辛抱強く待ち続ける。そんな情景を目にするのは何とも感動的であった<sup>32</sup>」と（図2）。

だが一体、何が彼らのような一般市民をそこまで惹きつけたのか。この点を確かめるべく、公式カタログに沿いながら今度は「人間」展示館の内部に目を向けてみよう。

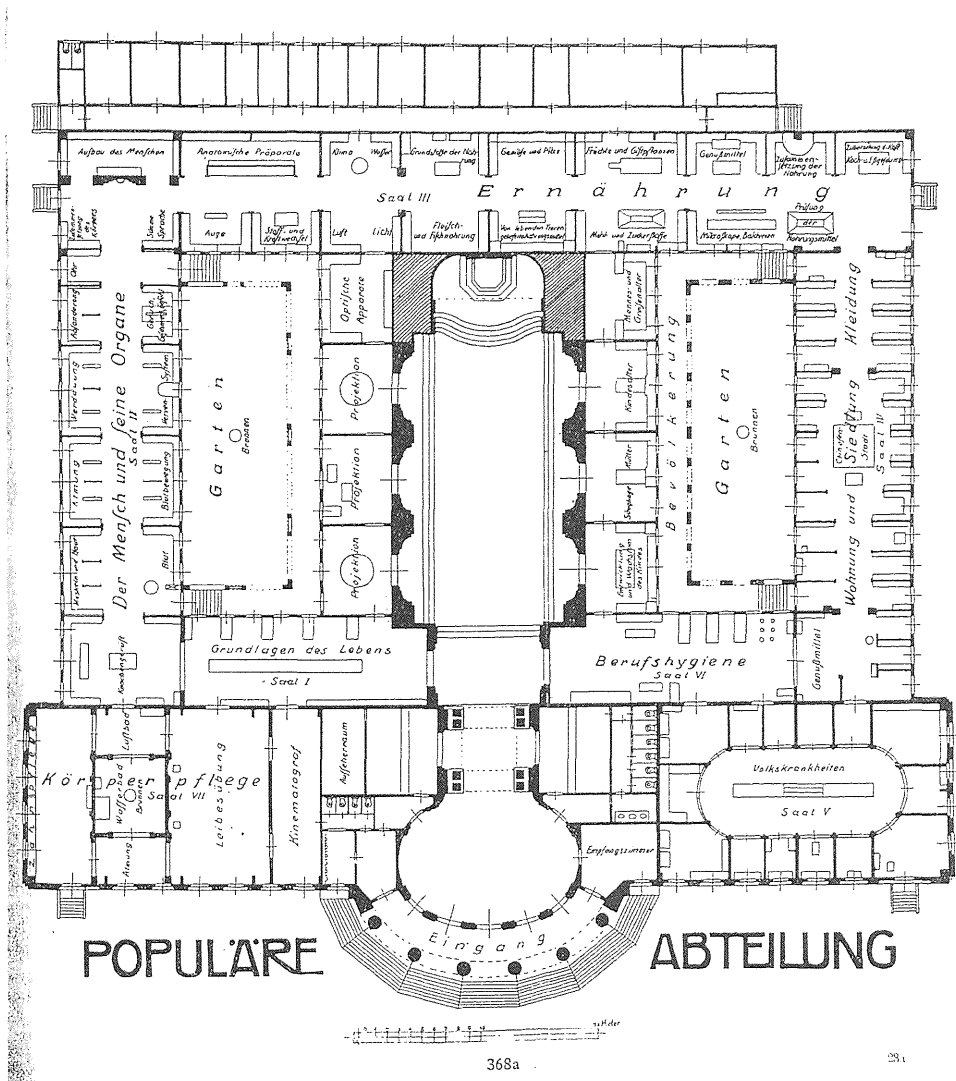


図3 「人間」展示館の見取図(Offizieller Katalog [1911?], o. S.)

この建物は全体で六つのホールからなり、時計回りで展示を観覧するよう設計されている。そしてそれぞれのホールには、①身体管理、②人間とその臓器、③栄養補給、④住居・宅地・衣服、⑤国民病、⑥職業衛生をテーマにした展示物が並べられている（図3）。前半三つは人間身体に関わる展示（個人衛生）、後半三つは生活・労働環境に関わる展示（公衆衛生）という構成だ。

展示の仕方も素人の理解を助けるための工夫が凝らされている。たとえばすべてのオブジェに解説パネルを付け、「最も素朴な人でも自分の身体の芸術的な仕組みを理解できるように」、できるだけ簡潔明瞭な説明を心掛けること。また、複数のホールにおいて同一の模型や標本を繰り返し使用することで、来場者が「人間身体における特に基本的な現象を記憶に強く刻み込む」ように誘導すること、等々である<sup>33</sup>。

だがなかでも特に目を引くのは、展示物そのものに施された仕掛けだろう。この博覧会のカタログでも、人間身体を「〔神の〕被造物のなかでも最大の芸術作品」と呼び、「衛生の本質すべてを理解するには、まず人間の臓器とその活動についての知識が必要」だと繰り返し強調されていただけに<sup>34</sup>、その展示方法にも並々ならぬ創意と工夫の跡が見て取れる。

たとえば心臓の仕組みを再現したオブジェには、365リットルの液体——カタログの説明によれば、心臓が30分間で血管に流す血液量と同等だというのが、おそらく1時間の誤りだろう——を容れた巨大なガラス容器を設置し、この小さな臓器がいかに大きな活動を担っているか視覚的にイメージさせる。また、心臓の鼓動には「脈を打つ合間に心拍時間の6分の1というごくわずかな中休みがある」という最新の研究成果にもとづき、その動きを正確に再現した機械装置を置くことで、来場者が心臓の運動・構造・機能を目で直接観察できるようにする、などがそうだ<sup>35</sup>（図4・上）。

このほかにも、「国民病」のホールでは実験研究で使用する顕微鏡を大量に展示し、来場客が生きた微生物の姿を実際に目にするように調整されていた<sup>36</sup>（図4・下）。これはじつは、8年前の「国民病とその克服」特別展ですでに試みられた展示法ではあったが<sup>37</sup>、国際衛生博覧会の開催時点でもなお細菌学の知見が一般民衆の間に根づいていないという判断から<sup>38</sup>、顕微鏡の台数をさらに増やして改めて展示されたものであった。

「人間」展示館が大きな反響を呼び起こすことができたのは、たしかにまずはリアルさを徹底追求したこれら一群の展示物が、それを観賞する者にある種の視覚的快楽を提供していたからだといえる。ただし、来

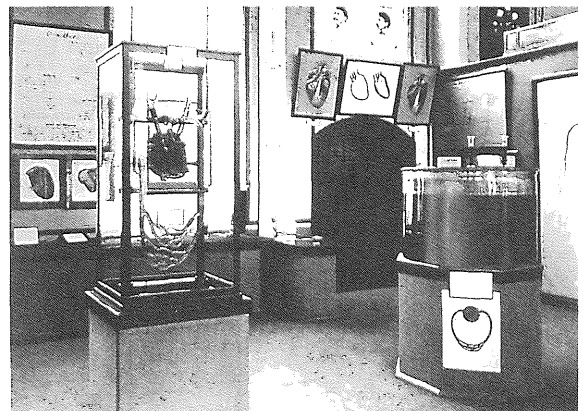


図4 上：機械仕掛けの心臓(左)と巨大ガラス容器(右)  
下：「国民病」ホールの顕微鏡(Seiring (Hg.), 1931, S. 177)

場客がこの展示館で享受していた快樂は、どうやら視覚的なものだけにとどまらなかったらしい。たとえば機械仕掛けの心臓にしても、来場客は何もその動作をただ拱手しながら眺めていたわけではない。むしろこの心臓は、「博覧会の来場客自身の手で作動させることができる<sup>39)</sup>」という仕組みになっていた。つまり、この客体はそれを見る主体の能動的な働きかけを待って、初めて十全に機能するように設計されていたのである。

おそらくこうした展示物への身体的な介入可能性も、「人間」展示館の成功をもたらした大きな要因になっていたのだろう。実際それは、この時期の一般向け雑誌のたぐいをひもといてみても裏づけられる。たとえば当時のドイツで最もポピュラーであり、かつすでに半世紀を越える伝統を誇っていた『ガルテンラウベ』という家庭雑誌にも、国際衛生博覧会のレポートが掲載されているが、そこでは「人間」展示館の工夫を凝らした仕掛けに次のような喝采が送られているのである。

「ここでは科学的・技術的に見て完璧といえる標本に沿って、人間身体とそのすべての組織の性質が、一般人にも分かりやすく、かつ独創的な仕方で紹介されています。来場者は生命の機能や、身体に対する光・空気等々の影響について、自動的に行われる実験を通じて楽しみながら教わることになります。一例を挙げるだけで十分でしょう。指で一つのボタンを押すとします。すると、空気の塊が地表ないし物体を1平方センチメートルにつき圧迫するのと同じ圧力を加えるには、どれだけの力が必要か、誰でもすぐに分かるという具合です。こうしたものがまだ沢山あるのです。『人間』宮殿は、大衆向け衛生学の壮大な訓練場といえましょう。そこでは誰もが何の説明書もなしに、いかに健康で働ける状態を維持できるか、さらにはいかなる病気や危険に日々さらされているか、そしてそれらをいかに予防できるかを学ぶことができるのです<sup>40)</sup>」。

いわば観覧する来場客と観覧される展示物との相互作用、そしてそうした「主客合一」を経由して衛生知識を身体的・体験的に把握することが、これらの仕掛けによって可能になるのである<sup>41)</sup>。このように知的な理解の仕方（対象を主体から切り離して頭で理解する）を徹底して斥けるような「遊戯性」の戦略こそ、オブジェの視覚的な迫真性と相まって、「人間」展示館を空前の成功に導いたものであった。

### 3. 恐怖の煽動

#### ムラージュ 蠟製標本

とはいえ全体として見れば、こうした遊戯性の戦略によって展示物の視覚的意義が相対的に低

下する、などということは起こらなかったと思われる。というのは「人間」展示館から離れてほかのパビリオンに目を向けてみると、この種の体験型の遊戯性は背景に退き、むしろ来場者の視線を釘づけにしようとする展示の方が圧倒的に多くなるからだ。なかでも国際衛生博覧会においてそうした視覚戦略を最も成功させたのは、いわゆる「ムラージュ」と呼ばれる、病気の患部を生々しく再現した蠟製の標本であった（図5）。

このムラージュの直接的な起源は、18世紀の解剖学で考案された蠟模型にさかのぼる。ただこちらは正常な身体を見本とした模型で、当初はボローニャやフィレンツェなど北イタリアの諸都市を中心に製作されていた。その後、18世紀末に臨床医学が確立されてからは、身体の表面に現れる症状に特化して疾患部位を再現した蠟製標本（ムラージュ）が登場し、おもに皮膚科学や性病学の領域で定着していくことになる。とはいえこれらのムラージュは、専門家の間では臨床研究・教育のためのツールとして知られていたものの、その用途の範囲は長いこと医療の現場を越え出るものではなかったらしい。その後、19世紀後半に衛生啓蒙運動が巻き起こり、さらにこの運動が博覧会というイベント方式と合流するに及んで、これら医療用のムラージュが持つ大衆啓蒙ツールとしての可能性が新たに発見されるにいたったのである<sup>42</sup>。

実際、リングナーは早くも1903年の「国民病とその克服」特別展で、この医療用ムラージュを博覧会の展示物として取り入れており、ここにドイツの市民は初めて、模型とはいえ性病のおぞましい末路をリアルな形で目の当たりにすることになった<sup>43</sup>。しかもそれに加えて、この20世紀初頭のヨーロッパではちょうど性科学が黎明期を迎えていた時期でもあり、1902年にはベルリンで「ドイツ性病撲滅協会」（Deutsche Gesellschaft zur Bekämpfung der Geschlechtskrankheiten）が立ち上げられたばかりであった。そのため「国民病とその克服」特別展が閉幕して以降、ドレスデンで国際衛生博覧会が開催されるまでの8年間は、この協会が博覧会方式による衛生啓蒙運動の中心的な担い手となり、その間に性病ムラージュが移動博覧会の展示物としてドイツ各地で積極的にお披露目されていたのである<sup>44</sup>。

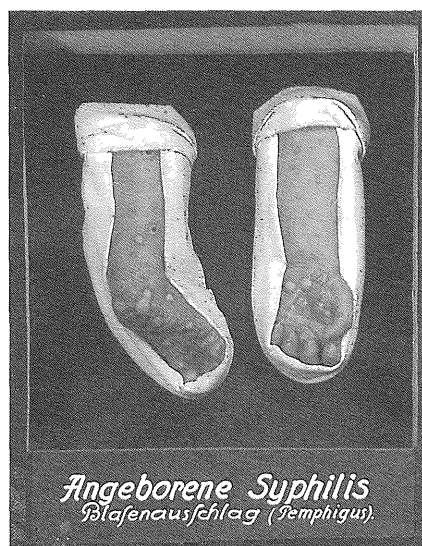


図5 先天性梅毒(上)と丘疹性梅毒(下)の症状を再現したムラージュ (Elfriede Walther et al., *Moulagen. Krankheitsbilder in Wachs*, Dresden, 1993, S. 10f.)

こうしたムラージュを用いた性病関連の博覧会運動が、20世紀のドイツ社会でどれほど大きな衝撃をもたらしたかを推し量るには、たとえば売春撲滅を謳う展覧会を舞台としたブレヒトの短編戯曲『闇の光明』（1919年）を想起してもよいだろう<sup>45</sup>。だがここではほかにも一つ、プレスラウで開かれた性病撲滅協会の博覧会に関する報告レポートを取り上げてみたい。こうしたレポートに描かれた来場客の姿に、この協会の衛生啓蒙運動が当時の市民にもたらしたインパクトの大きさを窺うことができる。

「多くの来場者、それも最高によい社会にいる人たちが、恐ろしいことにこれらの病気について想像すらしてこなかったことは間違いありません。……最も興味をそそられるのは、医師のガイドが行われるときの様子を観察してみることです。そこでは多くの場合、説明しているガイドの口から自分の死刑宣告を聞いてしまうのではないかと戦々恐々として顔を真っ青にしている人がいますし、またその傍らには、圧倒的な資料群を前にしながら、疚しさからか、それとも昔の、長い間忘れていたことを思い出したのか、今また頭の痛い思いをしている人も見つけ出せるのです！」<sup>46</sup>

## 恐怖の部屋

このようにムラージュの有用性はすでに衛生啓蒙運動で広く知られていただけに、ドレスデン国際衛生博覧会も、来場者の視線をつなぎ止めるオブジェとしてムラージュを大量に動員したのは自然な成り行きだったといえる。「人間」展示館はもとより、科学部門の「熱帯衛生」、「歯科疾患」、「感染症」、「乳児保護」、「アルコール中毒」、「結核」などの各グループでもこうしたムラージュが積極的に展示され、なかでも感染症のブースでは1067点の展示物のうち約160点（15パーセント）がムラージュで占められていたという<sup>47</sup>。ちなみにこれらのムラージュは、博覧会に合わせて作られたものもあったが、そのほとんどが展示のために外部の医療機関から借用されたものであり、本来は不特定多数の人間に公開する目的で製作されたわけではない。それだけに、これらの標本には最も重症化した末期の症例を再現したものが数多く含まれており、そうした事情がかえって悲惨な症状を見慣れていない素人の来場客を一層震え上がらせることになったと思われる<sup>48</sup>。

なおガイドブックを見る限り、国際衛生博覧会の展示物のなかで来場客を最も恐怖に陥れた——あるいは少なくともそうした恐怖の煽動を期待されていた——のは、やはりドイツ性病撲滅協会が展示を担当した性病ブースであったらしい<sup>49</sup>。その説明を読むと、あたかも読者に前もって注意を喚起するかのよう、このブースのおぞましが事あるごとに強調されているからである。

まずその冒頭から「大変興味深くはあるが、あまりよい気分のしない場所、そう、はっきりいえば身の毛もよだつような展示」として性病の特別グループが紹介されている。そこでは最初

にスピロヘータ（梅毒の病原菌）、動物性梅毒、それに第一期にある遺伝性梅毒の症状を再現した展示物が並べられるが、「それに続いて第二期に入った当該疾患のおぞましい姿」が不意に現れ、観覧している来場者を驚愕させる。だがもちろんそれで終わらない。そのすぐ後にも「恐るべき症状を呈した淋病」が控えているばかりか、「冷酷ないかさま医師が引き起こし、悪化すらさせた梅毒のすさまじい症状」や、「〔無資格の〕『治療師』が仕損じてしまった事例」なども、生々しいムラージュで次から次に再現される<sup>50</sup>。これらの酸鼻をきわめた性病ムラージュの傍らに、グラスや試料、性病関連の法律や社会改革、性病の歴史等々、説明的な展示物が添えられてはいるものの、ガイドブックの著者にとってこのブースはやはり、「衛生博覧会の恐怖の部屋（Schreckenhammer）」と呼んで差し支えない」場所であった<sup>51</sup>。

それゆえ国際衛生博覧会、特に性病ブースで見られるようなムラージュの一群は、ただ単にリアルさだけを求めて展示されたわけではない。それに加えてもう一つ、すでに性病撲滅運動で知られていた、いわゆる「見せしめの原則<sup>52</sup>」が、これらの展示を始めから終わりまで通貫していたのである。病気がもたらす悲惨な末路を再現したオブジェの数々は、それを見る者すべてに対して、彼ら自身の破滅的な未来を指し示す。もし博覧会が発する警告に従わなければ、誰にでも降りかかる劫罰というわけだ。

先に言及したプレヒトの『闇の光明』にも、じつはこうした「見せしめの原則」が戯画的に描かれている。この戯曲のなかで、展覧会の主人が来場客を前に即興の演説を披露するシーンがあるが、まさにその内容こそ性病撲滅運動における「見せしめの原則」のエッセンスを詰め込んだものであり、したがって国際衛生博覧会の「恐怖の部屋」のメッセージを代弁するものでもあった。

「親愛なる若い友人諸君、皆さんはただいま悪徳の報いである、売春によってもたらされた恐るべき病気をごらんになりました。……（左の標本グラスをさし上げて）腫瘍によって口蓋がまったく蝕まれてしまったこの口もかつてはあなた方の口と同じように教会で見事に賛美歌を歌ったものです、この形も崩れてしまった頭をかつては母の手が君たちの頭を撫でると同じように撫でさすったのであります。この胸は（蝨の模型に屈み込んで）潰瘍で穴だらけですが、かつてはここに諸君の胸と同じように十字架がかかっておりました。そしてこの目は（別の模型に屈んで）ふくれてすっかり蝕まれておりますが、この目が初めてぱっちり開いたときには、諸君の目と同じようにご両親の心を喜ばせたものだったのです。これを忘れないでいただきたい！ 絶対に二度と忘れないでいただきたい、誘惑が皆さんに近づき悪魔が誘いをかけるときも<sup>53</sup>」。

人間の身体を蝕む病気は、このようにおぞましい姿をしたムラージュを通じて単なる医学的現象であることをやめてしまう。それはいわば、倫理的・道徳的な罪業に対する「自然の報復」と

化して、ムラージュを眺める者にかつての悪徳の懺悔を強い、あるいはきたるべき誘惑を斥けるための恐怖心を植えつける。それゆえこれらのオブジェに備わっていた視覚的な生々しさは、単に来場者の好奇心を刺激したばかりではない。むしろそうした刺激によって過去に対する後悔の念と未来に対する不安感を倍加させ、もって博覧会が発する「道徳的」メッセージを効率よく貫徹させるという効果も期待されていたのである。

おわりに

とはいえ国際衛生博覧会におけるこうした道徳的な論調は、何も性病ブースに限定されていたわけではない。それどころか、この博覧会が発するありとあらゆるメッセージには、終始一貫して道徳論の色彩が強く見られる。たとえば乳児保護の領域における「人工ミルク」をめぐる問題——当時は加工食品に対して強い社会不安が存在していた<sup>54</sup>——でも、その議論が行き着く先は結局のところ無知な両親の「罪と罰」である。いわく、人工ミルクで育った子どもは、母乳で育った子どもと比べて20倍も高い死亡率を示す。たとえ運よく死を免れたとしても、その子は虚弱体質のために就学を一年は延期せざるをえないだろう。だがその遅れを取り戻そうとすればするほど、この子にとって勉学は大きな苦痛となり、ついには学校を去らなければならなくなる。職に就いたところで、もっと強健で有能なライバルとの競争にさらされるため、彼はすぐに脱落を余儀なくされ、ふたたび家族に負担を強いる結果となるだろう……<sup>55</sup>。

「この両親が衛生に関して啓蒙されていれば、子どもの未来は母乳にかかっているということを知ることでもできたであろうに。また、まずは少なくとも子どもを自然な形で育てられるよう、あらゆることを試そうとしただろうに。……この両親はそうしてあらゆる手立てを講じようとするまさにそのとき、人間が持ちうる価値ある財産とは健康にほかならず、ただ健康な身体にのみ健全な精神が宿りうるのだ、という衛生の根本思想から出立したのである<sup>56</sup>」。

むしろ、こうした道徳的な色調を帯びた悪因悪果論は、健康と病気をめぐる個人衛生の領域では特に珍しいものではない。歴史を振り返ってみても、18世紀後半に台頭してきた、身体を自己統制する主体というブルジョア的の理念が、やがて19世紀の統計学における「平均」モデルと結びついて、健康と病気を「正常と逸脱」ないし「中庸と放縦」という規範的言説にずらしていった、という経緯がある<sup>57</sup>。あるいは人類学が教えるように、汚穢とは何かを定義する分類基準や禁忌の設定基準が、それぞれの文化の価値体系に依存するものならば、そもそも健康・衛生・病気の問題系そのものが文化的な道徳規範のあり方と相即不離のものである、ということになる<sup>58</sup>。



それゆえ国際衛生博覧会の性病ブースで見られたような「見せしめの原則」は、それ自体でこのイベントの特徴を体現していたわけではない。そうではなく、あくまで多様なスペクタクル装置を通じて来場客に破滅の未来をより「リアル」に体感させること。——この点にこそ、視覚の時代に開催された国際衛生博覧会の最大の特徴があったといつてよい。

ところで、一般にこうして視覚性の上に成り立つ博覧会というイベント方式は、19世紀ヨーロッパの都市生活を「見世物化」するのに大きく貢献したといわれる<sup>59</sup>。すなわち、博覧会で展示されたオブジェのスペクタクル性が、そのまま現実世界に投影されることで、逆に現実世界の方があたかも博覧会のごとくスペクタクル化されていく、つまり現実の日常空間そのものが一種の見世物的様相を呈するようになる、というわけだ<sup>60</sup>。

そうだとすれば、この国際衛生博覧会も健康や病気の問題を、道徳や医学を越えて新たに「見世物」の領域へと連れ出すことになった、といえるかもしれない。現実世界で蔓延している性病などの病気は、衛生博覧会の時代のなかで、もはや悪徳の報いとして個人がこうむる劫罰にとどまらなくなった。それはむしろ、好奇の視線で眺められるセンセーショナルな何ものか、積極的に衆目にさらされるべきスペクタクル性を帯びた何ものかになったのではないか。

実際、当時の人びとが国際衛生博覧会に殺到したのは、何も一様にみずから進んで啓蒙されようとしたためではなかった。これらの来場客のなかにも、ただの啓蒙や学習とは異なるある種のセンセーションを求める者がいたからこそ、この博覧会はあれほど大きな成功を収めることができたのである<sup>61</sup>。ここでふたたびブレヒトの『闇の光明』を引き合いに出すと、そこでも次のように性病に対する「怖いもの見たさ」の心情が来場客の口を借りて語られている。堅苦しい道徳論でも医学論でもなく、こうした好奇心をくすぐる珍奇な見世物をのぞき見たいという欲求、これが衛生博覧会の時代に病気現象が直面した、ヨーロッパ社会の新たなまなざしだったのではないか。

「女：梅毒よ。いいわよ、梅毒だけで。あれが一番ものすごいんでしょう、ね。／パドウーク〔展覧会の主人〕：梅毒だけの観覧はだめです。講演は淋病から始まるんですからね。だから淋病も買ってください。／女：私の妹なんか一晩寝れなかったんですって、それほど興奮しちゃったのよ。／別の女：私も一度は入ってみなくちゃと思ってね。ふだんは木曜は映画に行くんだけど<sup>62</sup>」。

## 註

- 1 横山俊夫「若き日の現代文明——序にかえて」横山俊夫編『視覚の19世紀——人間・技術・文明』思文閣出版、1992年、6頁。
- 2 吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代』中公新書、1992年、22頁。

- 3 この種の特別博覧会の具体例を挙げようとすればそれこそ枚挙にいとまがないが、そのうちたとえば1896年にベルリンで開催された商工博覧会については、Bezirksamt Treptow von Berlin (Hg.), *Die Berliner Gewerbeausstellung 1896 in Bildern*, Berlin, 1997; また1903年には、帝国創建(1871年)以降のドイツにおける都市生活の変遷を展示したドイツ都市博覧会なるものがドレスデンで開催されている。この博覧会の報告書として、Robert Wuttke (Hg.), *Die deutschen Städte. Geschildert nach den Ergebnissen der ersten deutschen Städteausstellung zu Dresden 1903*, 2 Bde. Leipzig, 1904.
- 4 たとえばティモシー・ミッチェルによる植民地化権力の分析はその一例である(ティモシー・ミッチェル(大塚和夫・赤堀雅幸訳)『エジプトを植民地化する——博覧会世界と規律訓練的権力』法政大学出版局、2014年)。この書はエジプトの植民地化を促した近代主義の形而上学として、「博覧会としての世界」という近代ヨーロッパの視線のあり方を問い直した良書だが、そこで想定されているのはあくまで英仏で開催された一連の万国博覧会に限定されている。
- 5 こうした個別研究に数えられるものとしては、1931年のパリ植民地博覧会を分析した、パトリア・モルトン(長谷川章訳)『パリ植民地博覧会——オリエンタリズムの欲望と表象』ブリュッケ、2002年などがある。日本の事例に関しては、大阪の第五回内国勧業博覧会(1903年)を分析した、松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2002年。また、電気・衣服の博覧会や地方博の分析を通じて博覧会の「消費」的性格を強調した共同研究として、福間良明・難波功士・谷本美穂編『博覧の世紀——消費・ナショナリティ・メディア』梓出版社、2009年。
- 6 このドレスデン国際衛生博覧会と、その先駆形態として位置づけられる諸々の衛生博覧会の歴史について概観できる日本語文献としては、荒俣宏『衛生博覧会を求めて』角川文庫、2011年。また、この衛生博覧会で日本が出展した「生人形」に焦点を当てた珍しい考察として、石原あえか「近代医学と人形——ドレスデン国際衛生博覧会(1911)に出展された日本の生人形と節句人形」『Language, Information, Text』第21号、2014年、29-42頁。
- 7 Johanna Schrön, Ein „grosses, lebendiges Lehrbuch der Hygiene“ – Die Internationale Hygiene-Ausstellung in Dresden 1911, in: Carsten Kretschmann (Hg.), *Wissenspopularisierung. Konzepte der Wissensverbreitung im Wandel*, Berlin, 2003, S. 309-321, hier S. 309.
- 8 ベンヤミンの次の文章を想起されたい。「万国博覧会は商品という物神の巡礼場である。……万国博覧会は商品の交換価値を美化する。博覧会が作る枠組みのなかでは商品の使用価値は背後にしりぞいてしまう。万国博覧会は幻像空間を切り開き、そのなかに入るのは気晴らし(Zerstreuung)のためとなる。娯楽産業のおかげで、この気晴らしが簡単に得られるようになる。娯楽産業は人間を商品の高みに引き上げるやり方をするのだから。人間は、自分

自身から疎外され、他人から疎外され、しかもその状態を楽しむことによって、こうした娯楽産業の術に身をまかせている。商品を玉座につかせ、その商品を取り巻く輝きが気晴らしをもたらしてくれる……」(ヴァルター・ベンヤミン (今村仁司・三島憲一ほか訳)『パサージュ論』(第1巻)岩波現代文庫、2003年、14-15頁)

- 9 Ute Frevert, *Krankheit als politisches Problem 1770-1880. Soziale Unterschichten in Preußen zwischen medizinischer Polizei und staatlicher Sozialversicherung*, Göttingen, 1984, S. 11-17, hier zitiert nach: S. 15.
- 10 ミシェル・フーコー (高桑和巳訳)『安全・領土・人口』筑摩書房、2007年、51-52、69-108頁。引用は82頁。
- 11 Frevert, 1984, S. 21-36; なかには、病人は「国家の負担となるので死者よりもたちが悪い」という言説もまかりとおっていた (S. 32)。また、不健康な貴族と健康な市民というコントラストも好んで用いられたことから分かるように、こうした健康ブームはもっぱらブルジョア・イデオロギーに支えられたものであった (S. 34)。
- 12 19世紀のコレラ流行に関する歴史研究はすでにそれなりの蓄積を持っている。日本語で読めるものとしては、見市雅俊ほか『青い恐怖 白い街——コレラ流行と近代ヨーロッパ』平凡社、1990年。1830年代のイギリスにおけるコレラ流行を複眼的に考察したものとして、見市雅俊『コレラの世界史』晶文社、1994年。同時期のドイツにおける流行については、川越修『ベルリン 王都の近代——初期工業化・1848年革命』ミネルヴァ書房、1988年 (特に第8章)。同時期のフランスについては、喜安朗『パリの聖月曜日——19世紀都市騒乱の舞台裏』岩波現代文庫、2008年 (特に第4章)。1892年のハンブルクにおけるコレラ流行を中心的に扱ったものとしては、柿本昭人『健康と病のエピステーメ——19世紀コレラ流行と近代社会システム』ミネルヴァ書房、1991年。同じく1890年代のハンブルク・コレラを扱った古典的研究としては、Richard J. Evans, *Death in Hamburg. Society and Politics in the Cholera Years*, Penguin Books, 1987; また、政治的出来事や当時の心性を視野に入れつつ、1830年代初頭のプロイセン王国におけるコレラ流行を考察したものとして、Barbara Dettke, *Die asiatische Hydra. Die Cholera von 1830/31 in Berlin und den preußischen Provinzen Posen, Preußen und Schlesien*, Walter de Gruyter, 1995; さらに (4巻に及ぶ大著だが) 細菌学の文化史的系譜という観点から1830年代のコレラ流行を論じたものとしては、Olaf Briese, *Angst in den Zeiten der Cholera*, 4 Bde. Berlin, 2003.
- 13 19世紀パリでは「ガルニ」(特に4等級・5等級の下級ガルニ)と呼ばれる都市労働者向けの賃貸住宅があったが、極度に狭い部屋に大勢の労働者が押し込まれ、また汚物もあたり一面にまき散らされるなど、その衛生状態は惨憺たるものであった。このガルニの住環境問題とコレラの流行については、大森弘喜『フランス公衆衛生史——19世紀パリの疫病と住環境』

- 学術出版会、2014年、12-93頁。
- 14 19世紀後半のベルリンにおける住環境とコレラ流行、また下水道導入などの公衆衛生対策を詳細に研究したものとしては、金子光男『汚水処理の社会史——19世紀ベルリン市の再生』日本評論社、2008年。
  - 15 ヨーロッパにおける衛生博覧会の歴史を概観したものとしては、Alfons Fischer, Zur Geschichte der Hygieneausstellungen, in: *Deutsche Medizinische Wochenschrift*, 61. Jg. Nr. 34, 1935, S. 1365-1367.
  - 16 この「全ドイツ衛生・救命博覧会」については、H. Horn und W. Matthäi, Die erste deutsche Hygieneausstellung, in: *Zeitschrift für die gesamte Hygiene und ihre Grenzgebiete*, Jg. 9, 1963, S. 563-576; このドイツ初の衛生博覧会における見ものの一つは、ロベルト・コッホの結核研究の展示だったらしい。なお、この博覧会の展示物の一部を元に、1886年にベルリン衛生博物館が開館している (Stefan Poser, *Museum der Gefahren. Die gesellschaftliche Bedeutung der Sicherheitstechnik. Das Beispiel der Hygiene-Ausstellungen und Museen für Arbeitsschutz in Wien, Berlin und Dresden um die Jahrhundertwende*, Waxmann, 1998, S. 95-98)。ドレスデン都市博覧会の特別展「国民病とその克服」については、拙稿「コッホ細菌学と衛生博覧会——ドイツ衛生運動史序説」『史境』第68号、2014年、33-51頁。
  - 17 いうまでもなくこのオドールは口内殺菌の効用を持つ健康商品である以上、病気予防を目的とする衛生博覧会の理念と軌を一にしたものである。それだけに、リングナーが国際衛生博覧会のスポンサー兼企画者として精力的に活動を展開していたことに対しては、おのれの自己中心主義的な「物質的利潤」の追求、つまり自社製品の販促だけが目的なのではないか、という疑念が早い段階から上がっていた。一時はザクセン邦の下院でもこの疑惑が取り沙汰されたが、その際は国民自由党の議員がコレラの恐怖の記憶を持ち出して、そうした疑念の不毛性を批判している (Eike Reichardt, *Health, 'Race' and Empire: Popular-Scientific Spectacles and National Identity in Imperial Germany, 1871-1914*, Lulu.com, 2008, pp. 150-154)。
  - 18 K. A. Lingner, Vorwort, in: *Offizieller Katalog der Internationalen Hygiene-Ausstellung Dresden. Mai bis Oktober 1911*, Berlin, o. J. [1911?], S. 9.
  - 19 当局の衛生措置に対する住民の抵抗は、当時の衛生関係の史料をひもとけば頻繁に目にすることができる。もちろん国際衛生博覧会の企画書でも、この点は例に漏れず言及されている。「今日、行政当局が講じる衛生措置が純然たる無知から何度も抵抗に直面していることは、よく知られた事実であろう。たしかに昔は、コレラの侵入に対して処置を講じようとした衛生官を住民が暴力でもって攻撃するなどということも起こりえたが、それに比べれば今はまだマシにはなったのだろう。とはいえそれでも私たちは毎日のように、住民が社会衛生に関する指令を怒り心頭で受け取ったり、その指令に対して少なくとも消極的に抵抗したりというのを聞き及んでいる。たとえば予防接種反対論者や、公衆がいつも消毒措置に抱く反感

- を考えてみていただきたい。」(K. A. Lingner, *Programm für die geplante Internationale Hygiene-Ausstellung zu Dresden, aufgestellt im Auftrage des Ausstellungs-Direktoriums für die Königliche Sächsische Staatsregierung und den Rat zu Dresden*, o. O., o. J. [1910?], S. 28)
- 20 Lingner [1911?], S. 9f.
- 21 リングナーからドレスデン市長グスタフ・オットー・ボイトラー宛ての手紙より (cited from: Reichardt, 2008, p. 147f. [fn. 652])。
- 22 *Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden 1911* [Programm], o. O.[Dresden], o. J.[1911], S. 12. [aus dem Besitz der Staatsbibliothek zu Berlin]
- 23 *Führer durch die Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden 1911 und durch Dresden und Umgebung*, Berlin, o. J. [1911], S. 11f.
- 24 Klaus Vogel und Christoph Wingender, »..., deren Besuch sich daher unter allen Umständen lohnt.« Die I. Internationale Hygiene-Ausstellung 1911, in: *Dresdner Hefte*, 18. Jg. Nr. 63, 2000, S. 44-52, hier S. 44; *Führer* [1911], S. 17f.
- 25 K. A. Lingner, *Denkschrift zur Errichtung eines National-Hygiene-Museums in Dresden*, Dresden, 1912, S. 21.
- 26 オリンピックが万博から独立するのは、1912年の第5回ストックホルム大会以降のことである。なお、オリンピックが規模の上で万博を凌駕したのはようやく1936年、つまりナチス統治下のベルリン・オリンピックの時であった (吉見、1992年、273-275頁)。
- 27 *Führer* [1911], S. 50.
- 28 吉見、1992年、84-92頁。
- 29 たとえば科学部門の場合は、12のメイングループ (①光・空気・土地・水、②都市建設・家屋と住宅・照明・換気と暖房・給水体制・都市清掃・埋葬方法、③栄養論・肉摂取・乳製品摂取・野菜類と嗜好品・食糧研究、④衣服・入浴・身体訓練、⑤生理学と労働の衛生学・業務用毒物・特殊な職業衛生・労働福祉、⑥微生物学と寄生虫学・免疫学と予防接種・感染症・動物疫病・疫病撲滅・消毒、⑦看護・救命、⑧乳児保護・学校衛生・青少年保護、⑨道路と鉄道・船舶交通・宿泊施設、⑩陸軍・海軍、⑪熱帯衛生、⑫統計) と5つの特別グループ (①結核、②癌、③性病、④アルコール中毒、⑤歯科疾患) から構成されていた (*Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden 1911. Gruppen-Ausschüsse*, o. O. o. J. o. S. [aus dem Besitz der Staatsbibliothek zu Berlin])。
- 30 Lingner [1910?], S. 22f.
- 31 Lingner [1910?], S. 26f.
- 32 Lingner, 1912, S. 19.
- 33 *Offizieller Katalog* [1911?], S. 366.

- 34 *Offizieller Katalog* [1911?], S. 365f.
- 35 *Offizieller Katalog* [1911?], S. 372.
- 36 *Offizieller Katalog* [1911?], S. 383f.; *Führer* [1911], S. 47; なお来場客が勝手に操作できないよう、顕微鏡にロックをかける特殊な器具（これもリングナーの発明による）が取り付けられていた（Georg Seiring (Hg.), *10 Jahre Dresdner Ausstellungsarbeit. Jahresschauen deutscher Arbeit 1922-1929 und Internationale Hygiene-Ausstellung 1930/31*, Dresden, 1931, S. 176）。ちなみに現在のドレスデン衛生博物館でも同じように顕微鏡が展示されているが、そこでは水を入れた小型ケースにプレパラートを収納するという単純な措置で乾燥を防いでいた（写真撮影は禁止）。当時の国際衛生博覧会でも、乾燥防止には同じような手法が採られたものと推察される。
- 37 これについては、拙稿、2014年、41-46頁を参照。
- 38 カタログにも次のような記載がある。「こうした〔感染症に関する〕迷信は今もなお残っています。それも未開民族に限った話ではなく、私たちのなかにさえ全階層で見られるのです。」（*Offizieller Katalog* [1911?], S. 384）
- 39 Seiring (Hg.), 1931, S. 176.
- 40 Prof. Dr. Emmerich, Die Dresdner Hygieneausstellung, in: *Die Gartenlaube*, 1911, S. 618-623, hier zitiert nach: S. 620. 傍点は引用者による。
- 41 ガイドブックの次の記述は、展示物の視覚戦略に加えて、こうした体験型学習も念頭に置いて書かれたのだろう。「彼〔リングナー〕にとって特に大事だったのは、学問的な素養のない素人の方に対しては、死んだ形式で材料を提供するのではなく、すぐに身につくような、自然を忠実に模倣した模型や標本で、それもできるだけ生き生きとした（lebendig）仕方ですべてを提示する、そしてそうすることによって来場者の方々を疲れさせず倦ませないようにする、ということなのです。」（*Führer* [1911], S. 43）
- 42 医療用ムラージュの歴史を概観したものとしては、Thomas Schnalke, Die medizinische Moulage – ein historischer Überblick, in: Susanne Hahn und Dimitrios Ambatielos (Hg.), “*Wachs – Moulagen und Modelle*” *Internationales Kolloquium 26. und 27. Februar 1993*, Dresden, 1994, S. 13-28; また、皮膚科におけるムラージュの登場とドイツの詩人ゲーテとの接点、ならびにムラージュ研究の指針を示したものとして、石原あえか「皮膚科ムラージュをめぐって 医学と芸術の邂逅（1）——皮膚科ムラージュの起源とドイツ詩人ゲーテの接点」『西日本皮膚科』第77巻第4号、2015年、340-344頁。
- 43 Susanne Hahn, Moulagen in der Gesundheitsaufklärung, in: Hahn, Ambatielos (Hg.), 1994, S. 39-46, hier S. 39.
- 44 Lutz Sauerteig, Lust und Abschreckung: Moulagen in der Geschlechtskrankheiten aufklärung, in: Hahn, Ambatielos (Hg.), 1994, S. 47-68, hier S. 50f.

- 45 この『闇の光明』のなかでブレヒトは、ムラージュの生々しさについて登場人物に次のような台詞を言わせている。「〔展覧会の〕入口から人々が出てきて散っていく。／人々：気持ちが悪くなったよ。——俺は吐いちゃった、バケツが置いてあってよかったよ。——なあおい、見たあとの気持ち悪さは、本物の女郎屋を出てくるときとまったく同じだなあ。／男（次の回を待つ男）：見て損はしないか？／出てきた男：絶対ないね。お勧めは梅毒の展示場だね。とてもきれいな模型があるよ。」（ベルトルト・ブレヒト（岩淵達治訳）『闇の光明』『ブレヒト戯曲全集』（第8巻）未来社、1999年、85-108頁、引用は92頁）
- 46 Zitiert nach: Sauerteig, 1994, S. 54.
- 47 Hahn, 1994, S. 40.
- 48 Elfriede Walther, Susanne Hahn, Albrecht Scholz, *Moulagen. Krankheitsbilder in Wachs*, Dresden, 1993, S. 11.
- 49 なおこの性病ブースでは、未成年の場合、成人の付き添いなしでの立ち入りは禁止されていた（Walther, Hahn, Scholz, 1993, S. 15）。こうした措置には、子どもや若者に対して性的なものが持つ破滅的作用（たとえば自慰行為がもたらす身体的・精神的崩壊）を恐怖するという、近代ヨーロッパのニューロティックな心性が反映されていると思われる。こうした性をめぐるヨーロッパ的の心性については、アラン・コルバン（尾河直哉訳）『快樂の歴史』藤原書店、2011年。
- 50 *Führer* [1911], S. 38f.; *Offizieller Katalog* [1911?], S. 103.
- 51 *Führer* [1911], S. 39.
- 52 Sauerteig, 1994, S. 53.
- 53 ブレヒト、1999年、98-99頁。
- 54 飲用ミルクをはじめとする加工食品は、20世紀初頭でもまだ殺菌の慣習が普及していなかったため、品質上大きな問題があった。しかも当時の食品産業のなかでミルク業界は最も偽装が横行していたといわれ、早くから公権力による規制を招くことになった。なお国際衛生博覧会直前の1910年には、代用食品であるマーガリンで約180人が食中毒を起し、2歳半の幼児1人が死亡するという事件も起こっている。このミルク問題や加工食品の偽装をめぐる社会不安については、南直人『〈食〉から読み解くドイツ近代史』ミネルヴァ書房、2015年、83-117、205-240頁。
- 55 Lingner [1910?], S. 14f.
- 56 Lingner [1910?], S. 15, Hervorhebung im Original.
- 57 Philipp Sarasin, *Reizbare Maschinen. Eine Geschichte des Körpers 1765-1914*, Frankfurt a. M., 2001, S. 73-82, 173-176.
- 58 メアリ・ダグラスは、汚穢の観念を文化的な象徴体系にもとづく世界の秩序づけから漏れた

「余剰」と見なして、こう説明する。「汚れとは、絶対に唯一かつ孤絶した事象ではありえない。つまり汚れのあるところには必ず体系が存在するのだ。秩序づけとは、その秩序にとって不適當な要素を排除することであるが、その限りにおいて、汚れとは事物の体系的秩序づけと分類との副産物なのである。……それは相対的観念なのである。」(メアリ・ダグラス (塚本利明訳) 『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫、2009年、103頁)

59 Venessa R. Schwartz, *Spectacular Realities. Early Mass Culture in Fin-de-Siècle Paris*, University of California Press, 1998, pp. 1-12.

60 ミッチェル、2014年、3-50頁。

61 Sauerteig, 1994, S. 57.

62 ブレヒト、1999年、86頁。

※本稿は、科学研究費補助金・若手研究(B)(研究課題番号：15K16855)による研究成果の一部である。